

～使ったものはきちんと返すという私の常識～

図画工作や手芸の授業をする中で、何度も「使い始めにあった数と同じ数返す」「ハサミは刃先を向けて返さない」と注意をしてしまいます。クレヨンが返される時は、箱を開けて数のチェック、針が返される時は針山代わりのスポンジに縫い針とまち針が最初と同じ数あるかこれもまた生徒と一緒にチェックします。クレヨンは制服のポケットや赤土の床から出てくることが多々。縫い針まち針は机の中や赤土の床の中から。以前、針が1本足りなくその針山を使っていた生徒に探させた時、教室から飛び出してしばらくして走って帰ってきました。その時の言葉が「somebody が持って行っていた。」と言うものでした。針1本をとことん見つかるまで探させた自分、そして制服のウエスト部分にその針を刺して戻ってきた生徒の somebody の言葉、針一本を探させた自分に対する苛立ちと生徒の言葉に対する苛立ちが交差し複雑でした。そしてまたその後まさかその somebody を聞く日が来るなんて思いもしませんでした。ハサミを使った授業の日の出来事です。使った道具の最終チェックをした際にハサミが1本足りませんでした。「あと1本ハサミが返って来てないよ。ハサミ1本返して～」と何度か言った後、一人の生徒が前の席の机の中からハサミを取りだし「somebody がおいた。」と言って私に返したのです。その席は最初から誰も座っていませんでした。“また somebody だ” そう思わずにはいませんでした。

(使ったもの“道具”はきちんと返す) 私が生徒に言うことは、もしかしたらずっとこの村の中で生活する中では単に外国人が教えつける異文化で必要ないんじゃないか?とってしまうのです。仮に日本で日本の子どもに「どうして使ったものはきちんと返さないといけないのですか。」と質問されたら何と答えましょう。「次に使う人がないと困るから。」「針やまち針が落ちていたら知らないで踏んだ人がけがをするから。」誰もがうなる感心する答え方がわかりません。使ったものはきちんと返すというのが常識として育ってきたからなのでしょうか。ある時、村の学校の先生に「ノリをくれ。」と言われたことがあります。理由は私がノリをたくさん持っているからです。もちろんあげる事はしませんでした。たくさんある人がない人に分けるのはこの先生が常識として育ってきたからなのです。互いの違いを認め合うことはスプートニクの理念でもあります。異文化の中で活動するのは、何年経ってもとても難しいです。しかし、今後も図画工作、手芸をする中で使ったものがきちんと返されないと見つかるまで探させます。たとえ私の常識がガーナの非常識であったとしても。たとえ村の生活の中で私の常識が役に立たなくとも。

国分 敏子



2018年7月3日 ガーナ挨拶 No 18